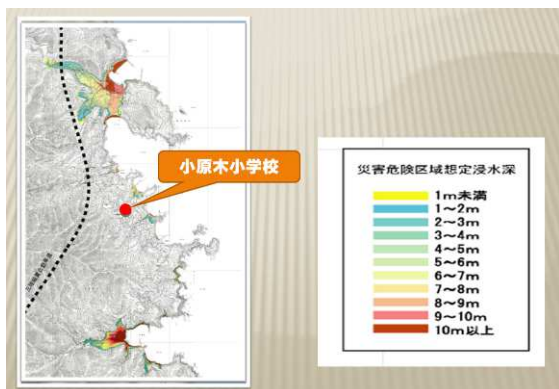


1 はじめに

(1) 本校の位置



本学区は、岩手県陸前高田市に接する宮城県最北端に位置し、南北に3つの地区（大沢、館、只越）で構成されている。校舎は、学区中央の海拔40mの高台にあり、景勝地の大理石海岸と広田湾が眼下に広がっている。

平成22年12月に、三陸自動車道の霧立トンネルが開通し、気仙沼市鹿折地区までの所要時間が10分程度に短縮され、国道45号線による交通の便が大変良くなっている。

また小原木地区は、唐桑半島の入口にあたり、半島先端の御崎までは、約10kmの距離である。

(2) 震災時の被害

震災による本校校舎・児童と職員等の家屋の被害は、次のとおりである。

校舎	東側昇降口付近基礎部分亀裂（亀裂幅 最大数cm 長さ東西 5 m 南北 7 m）
校庭	東側亀裂（幅：最大1cm、長さ：5～8m数本、西側土留め石垣：数個崩落）
児童	自宅全壊 21名、大規模半壊 7名、半壊 2名、計 30名
職員	自宅全壊 3名、大規模半壊 2名、半壊 0名、計 5名
地域	大沢地区 8割・只越地区 9割の家が全壊及び半壊、館地区 5～6軒が全壊及び半壊

地震発生から津波襲来時の時間帯は、全校児童を校庭に避難させ、迎えに来た保護者と共に校地内で待機したことにより、児童にも保護者にも人的被害はなかった。

また、平成25年度全校児童数44名の内、1～3年生が被災当日に保育園児で、交通の遮断等により保護者と離れて保育園で不安な夜を過ごしている。

(3) 震災後の影響

- ① 仮設住宅の建設：平成23年8月末に校庭南側に5棟、30戸と駐車場を設置。
- ② 校舎前、校庭の5分の1のスペースが運動場所となったため、サッカーなどのボールゲームや走運動等の学習が難しい状況になっている。運動会は、旧小原木中学校グラウンドで小中学校合同開催を継続実施している。
- ③ 小中学校仮設住宅及び学区外みなし仮設住宅等からの通学児童：14名（平成25年度）
- ④ 支援の状況：震災直後の支援物資を始めとして、国内外からの多数の支援活動や義援金、メッセージ等をいただき、本校の教育活動の推進に大きな寄与があった。
 - ・義援金の総額：184万6613円（平成25年11月1日現在）
 - ・主な購入物品：長胴太鼓（1）、しめ太鼓（4）、プール用人工芝（40m）、ジェットヒーター（2台）、iPad（4台）、ブルーレイプレーヤー（6台）、ノート型コンピュータ（1台）、職員用ヘルメット（12個）
 - ・主な支援活動：オペラ歌手表敬訪問 宮本様、増原様 [パルマ音楽院（イタリア）]
学校支援ボランティア H24 通年 [中内祥子様：広島大学、渡辺国権様：東京学芸大学]
緑のカーテン植付授業 [エスベック(株)、みどりの学校推進グループ]
花苗・植え付け作業の支援（年2回）[NPO法人ガーデンを考える会]
1～4年秋の遠足（狛鼻溪）支援 [一関市：菅原様]

2 子どもたちからのメッセージ

「感しゃの気持ち」 3年 梶川隼和 「平成24年度支援への御礼と感謝の文集」より
ぼくは今、感しゃのきもちでいっぱいです。しんさい後、たくさんの支援物資がとどきました。食べ物がないで困っていた時、とどいた食べ物は、とってもうれしくておいしかったです。文ぼうぐもうれしかったです。いただいた文ぼうぐは、今も大切に使っています。

また、ひなんじょやかせつ住宅には、たくさんボランティアさんが来てくれました。冬の寒い日に、お茶会を開いてもらいました。あったかいお茶を飲んだ時、なんだかほっとしました。それから、ぼくたちといっぱい遊んでくれました。ぼくのいたひなんじょは、子供が少なくて、遊んでくれる人もあまりいなかったの、いっしょに遊べてうれしかったです。おにごっこやかくれんぼ、雪がっせん、とても楽しかったです。

次はぼくの番です。もしまたどこかでしんさいがおこったら、しえん物しを送って助けたいです。また、さみしい気持ちになっている子どもといっしょに遊んであげたいです。



ボランティアの皆さんとの長縄とび

3 保護者からのメッセージ

「お世話になった皆さんへ」 4年児童の母 「平成24年度支援への御礼と感謝の文集」より
あの日、私は市内の車中で地震と遭遇しました。「警報・避難」の防災無線が鳴り響く中、すでに渋滞の始まった道路・信号の止まった交差点を何とかくぐり抜け、無我夢中で子供たちがいる小学校へと向かいました。

校庭には、掃除着のまま避難した子供たち。次から次へと集まってくる保護者とともに、学校に避難待機しました。3月の雪の降る寒さと何度も襲ってくる余震に、不安は募るばかり……。しばらくすると、校庭から見える広田の海が茶褐色に濁り、みるみるうちに潮が渦巻きました。かすかに家が流されていくのを見た時は、ものすごい不安が襲ってきました。

私の家は、高台にあったので津波被害は免れましたが、その晩は暗く寒く、余震に怯え、車のラジオで聞く情報に、さらなる不安を感じずにはられませんでした。

その日から、自宅避難の私たちは、家族や親戚、近所の人たちと協力しながら、いつなくなるか分からない水や食べ物の不安を抱えながら生活しました。

そのうち、私たちのところにも支援物資の配給が始まりました。それらは、日本各地はもちろん世界各国から届けられた物でした。（世界中のみんなに助けられているんだ。）という感謝の気持ちで、いっぱいになりました。

1か月ほどで、ようやく電気が復旧し、私たちの日常生活も徐々にそれまでの生活に戻っていき、子供たちの学校も再開しました。中には、震災の不安を抱えたままの子供たちもいたことでしょう。

でも、全国各地からのたくさんのご支援やボランティアの方々のおかげで、今子供たちは、明るく元気で笑顔です。いろいろな学校などから送られてくる支援物資とそれらに添えられた励ましのお手紙・メッセージ。その内容に心が温かくなりました。「ありがとう」の気持ちで、いっぱいです。

これからも私たちは、あの震災の記憶とともに生きていかなければなりません。それは、辛く悲しいことです。でも、ご支援をくださった皆さんからの数々のお見舞い・励ましのお言葉、あたたかいお心を忘れずに生きていきます。そして、復興へ向かって・未来へ向かって頑張ります。



思う存分遊んだ後の笑顔の子供たち

4 支援者からのメッセージ

「一步」：中内祥子さん作詞（広島大学学生）

平成24年度に、本校に学習支援ボランティアとして活動していただいた中内祥子さんが、活動を終了するにあたり、子供たちに詩をプレゼントしてくださいました。さらに、市内のボランティア活動で知り合った、Ricoさん（群馬県のシンガーソングライター）が作曲をしてくださり、心に響く宝物の曲ができあがりました。

この曲は、昼の放送のテーマ曲として毎日、子供たちに優しい心を届けてくれています。



「始まりの一步」CD・ジャケット

「一步」 作詞：中内祥子&RICO 作曲：RICO

あたたかな春の風に吹かれて
私たちは 出逢った
よそよそしかったあの頃
今ではきらきら 溢れる笑顔たち

こんな日がずっと ずっと続けばいいな
一緒に笑ったり 一緒に泣いたり
全部大切な宝物
夢へ向かって一步
立ち止まる日もある だけど一人じゃない
明日へ向かって一步
大きく力強くはばたく
心は 心はいつもそばに

時の流れは早すぎると
別れがつかなくなるのは
愛する幸せを知って
分け合う喜び君からもらったから

ふっとよみがえる 共に過ごした日々よ
美しくなくても 立派じゃなくても
優しく強い花を咲かせよう

夢へ向かって 一步
立ち止まる日もある だけど一人じゃない
明日へ向かって一步
大きく力強くはばたく
心は 心は いつもそばに

これから歩む道は でこぼこの道
それでも歩き続けよう
未来を信じて 自分を信じて

夢へ向かって 一步
立ち止まる日もある だけど一人じゃない
明日へ向かって一步
大きく力強くはばたく

夢へ向かって 一步
立ち止まる日もある だけど一人じゃない
明日へ向かって一步
大きく力強くはばたく
心は 心はいつもそばに

幸せな 幸せな日々をありがとう

5 教職員からのメッセージ

「夢へ向かって一步、明日に向かって一步」

教務主任 伊藤英樹

東日本大震災後、疲弊していた小原木の土地に日本国内だけでなく世界中の方々から、温かいメッセージや支援物資や義援金の数々をいただいた。中には、実際に本校を訪れ、歌や演劇、パフォーマンスを行って、子供たちを励ましてくれる方々もいた。

子供たちは、そうした方々の優しさに触れる中で、人間同士の心の結びつきの素晴らしさを感じ、愛情と勇気・希望をいただいていた。

秋の学芸会では、震災後に様々な方々からいただいた数多くの支援に対する感謝の気持ちと、保護者や仮設住宅を含めた地域の方々に元気を届ける気持ちも込めて合唱を発表している。

次に、これまで3年間の発表曲を紹介する。



ボランティアのお二人とのお別れ会

(1) 平成23年度：「しあわせ運べるように」

阪神淡路大震災後に、神戸復興を願い作詞・作曲された歌を小原木バージョンとして、全校の児童・教職員で合唱した。

震災から半年、長く厳しい避難所生活を強いられていた家庭のすべてが、ようやく仮設住宅へ入居し新たな生活をスタートさせることができた頃である。

そのような中で開催した学芸会。「自分たちは前を向き、がんばって取り組んでいる様子を届けたい。」「私たちが地域の皆さんを笑顔にしてあげたい。」という声が、たくさんの子どもたちから聞こえてきた。



全校児童・職員による合唱

(2) 平成24年度：「ふるさと」

震災から1年半、2年ぶりに市内小中学校音楽祭が開催されることとなった。

震災によって、大きくその風貌を変えてしまった小原木地区。それでも自分たちはこの土地を愛し、この土地で生活し、この土地に住み続けていくという地域の人たちの想いを熱く受け止め、ふるさと小原木に想いを寄せた歌を選曲した。

「支え合いたい人がそこにいる あしたを信じて歩いてる 花も星も虹の橋も すべては心の中にある」という歌詞に、自分たちからのメッセージを届けた。

(3) 平成25年度：「一步」

平成24年度、ボランティアとして唐桑で活動する学生や地元の若者が一緒になり、復興まちづくりサークル「からくわ丸」を立ち上げた。その中の2名の大学生が、学習支援ボランティアとして1年間本校の子どもたちのために力を注いでくれた。



Ricoさんの伴奏による合唱「一步」

校庭に仮設住宅が建ち、思うように運動や遊びができない毎日。家庭に帰っても、仮設住宅内は子どもたちの学習環境としては十分ではない。そんな中、子どもたちを連れ出し、汗だくで校庭を走り回る彼らの周りには、明るい笑い声が響き渡る。子どもたちに正面から向き合い過ぎてきた彼らが、子どもたちとの別れを前にした3月、想いを詩に託し曲をプレゼントしてくれた。

曲「一步」には、「夢へ向かって一步、明日に向かって一步」の詩に表されているように、子どもたちとの出会いから、ともに過ごしてきた日々の出来事、子どもたちの将来に向けてのメッセージを感じることができた。

今年度の学芸会では、そろって来校した中内さん、渡辺さん、Ricoさんと、子供たちはもちろん、保護者・地域の皆さんとも一緒に歌い合い心をひとつにすることができた。

「一步」は、子どもたちの心の歌として、これからも学校の様々な場面で歌い継いでいきたい。

6 おわりに

本校での、過去2回の津波被害を振り返ると、明治29年6月15日の三陸津波により44名の児童を失い、昭和8年3月3日には2名の児童を失っている。いずれも、夜間の津波による犠牲である。情報も迅速に伝達されない時代のこととはいえ、察するにあまりのある悲しい歴史である。

今回の東日本大震災では、日中の明るい時間帯で、高台にある校舎で待機できたことが、津波からの人的被害を最小限にとどめることにつながった。

震災後、地域の防災士の方からの指導・助言を受け、防災計画を改訂するとともに、小原木中学校生徒会の「海拔表示プロジェクト」の後押しもあり、登下校時や家庭における海拔30m以上に避難するという避難方法についても、地域や保護者とともに研修と訓練を積んでいる。

今後も、減災・防災の意識を緩めることなく、また、いただいた支援に対する感謝の心を忘れずに、「人と人の絆」を大切にしながら、職員が一丸になって充実した教育活動を推進していきたい。